

写楽と法光寺

江戸時代の謎の浮世絵師として、人気の高い、東洲斎写楽に関する資料（過去帳）が、平成九年六月、徳島市「写楽の会」の調査によって、当、法光寺にて発見されました。

「今日山 法光寺」は、元和三年（一六一七）に江戸浅草横山町に創建されました。明暦三年（一六五七）の大火の後、江戸築地に移転し、同地で三百有余年の歴史を重ね、その後、平成五年に越谷市に再移転した、浄土真宗本願寺派の寺院です。

さて、写楽は、寛政六年（一七九四）から七年にかけての十ヶ月間に、百四十種あまりの役者絵などを残し、忽然と姿を消しました。写楽については、天保十五年（一八四四）、江戸考証家・斎藤月岑（げっしん）が「増補浮世絵類考」の中で、「写楽 天明寛政年中の人 俗称 斎藤十郎兵衛 江戸八町堀に住す 阿波侯の能役者也 号東洲斎」との記述を残している。

この月岑の記録から、写楽・十郎兵衛説が有力であったが、生没年などが不詳で、十郎兵衛の輪郭がいまひとつはっきりしなかったため、写楽の正体について、諸説が取りざたされてきました。

しかし、当寺の江戸時代の過去帳、文政三庚辰年（一八二〇）の部の中に、斎藤十郎兵衛に関する記載が発見され、写楽・十郎兵衛説を書いた過去の記述を、証明することとなりました。

過去帳には、「辰三月七日 釋大乗院覺雲居士 八町堀地藏橋阿州殿御内 斎藤十郎兵衛事 行年五十八歳 干住ニテ火葬」と記されていた。

さらに、斎藤家代々について調査した結果、寛文八年（一六六八）から明治初期に至る約二百年の間に、およそ三十名の記録が確認され、斎藤家と菩提寺法光寺との密接な関係が推察されることとなりました。

そして、これまで語り言われてきた写楽・十郎兵衛説が実証され、この説の信憑性も一段と深まりました。